

## 母親世代タスクチーム報告書

### 新規加盟員獲得と中途退団防止の14のポイント

平成 28-29 年度事業として、新規スカウト募集対象年代児童のお母さま世代のご意見を聞いて募集活動や団、隊運営の一助とすることを目的とした「母親世代タスクチーム」を編成して、意見交換会を5回にわたり開催させて頂きました。(日本連盟 団支援・組織拡充委員会)

#### 母親世代タスクチーム会合のテーマ

- 1、ボーイスカウト活動に望むこと - わが子は将来どんな子になってほしいのか。
- 2、母親世代から見たボーイスカウトのイメージ
- 3、わが子にとって、母親にとってボーイスカウトとは
- 4、母親世代に共感をされるボーイスカウトのPRポイントとその方法を考える。
- 5、母親視点から考えたこれからのボーイスカウトに望むこと

#### \* 母親世代タスクチーム会合から導けたもの

##### 1、母親のハートをしっかりつかむ！！

##### point 1 まず、母親の一般的なボーイスカウトのイメージを理解する

- ① 「宇宙飛行士はみんなボーイスカウト」というポスターを見ると「入れよう」と思う。  
スカウトアンバーサダの宮川大輔さんの印象が良い  
⇒やはり、スカウト出身の著名人を紹介するのは、母親にボーイスカウトへ興味を持ってもらうきっかけとしては有効なツールと言える
- ② 案内パンフレットを読んだが、「募金、国際活動、キャンプ・・・」という感じで、具体的活動が全く分からなかった ⇒ 日本連盟が作成するパンフレットは、ボーイスカウトのイメージを伝えるものになる。具体的活動は、各団で作成する資料対応が必要になる。



スカウト活動をしている野口さん

\* アメリカの宇宙飛行士の7-80%はボーイスカウト出身者であるとのこと

##### point 2 母親がわが子の成長に何を望んでいるかを理解する。

- ① リーダーシップを発揮できる子、自ら発信・自己表現できる子になってほしい。  
⇒ 学校ではリーダーシップを発揮できる機会の少ない子にも、ボーイスカウトでは、意識的に

その場を作っていることを理解してもらうことは重要である。例えば、学校ではできる子、する子は決まっている。野球やサッカーは、いつも上手い子がレギュラーになる。しかし、カブスカウトでは必ず、組長か、次長を経験させていること等を説明する。

⇒ 発表や、自己表現の場は、どのスカウトにも平等にその機会があることを説明する。

② 野外で活動させたい。

⇒ ボーイスカウトは「野外が教場」であることを説明する。ただし、発達段階に応じて5つの部門があり、年齢に応じて、累進的に活動を行っていることを説明しないと、ビーバー部門で過度な野外活動を期待し、失望させてしまう可能性がある。

③ 判断力、考える力を持たせたい。

⇒ この運動の成り立ちは、「スカウティング・フォア・ボーイズ」を読んだ少年たちが自然発生的にそのまねを始めたことにある。この成り立ちから、伝統的にボーイスカウトは子供たちの自発性を大切にしている。この自発性を大切にすることこそが、考える力を育む大きな原動力となっていることを説明する。



団キャンプでの営火場の一コマ

**point 3 ベンチャー隊、ローバー隊のスカウトと活動が見える化する。**

① ボーイスカウトを続けても、わが子がどのように成長するかわからない。

⇒ 入隊説明会や上進説明会又は保護者会にベンチャースカウトや、ローバースカウトに参加してもらい「ビーバースカウトで得たこと」や「ボーイスカウトをやっていてよかったこと」などの話をしてもらい、将来の我が子のイメージがしやすくなる。

② ビーバー隊や、カブ隊の保護者は、国際交流、高度な野外活動などを含め「この先にあること」がわからない。

⇒ 入隊説明会や、上進説明会又は保護者会において、当該部門の活動などについて説明するだけでなく、活動が高度で専門的になるベンチャー隊やローバー隊の活動にも触れ、ボーイスカウトを続けていくとこのような活動経験ができることを具体的に説明する。

**point 4 母親は、隊指導者とのコミュニケーションを望んでいる。**

① わが子が隊の中でどのような活動をし、集団の中でどのような様子なのかかわからない。また、忙しい隊長にどのようなことを聞いてもよいのかかわからない。

⇒ 活動が終わるごとに短時間でもよいので、その日のスカウトの様子を保護者に伝える。

定期的に保護者会を開催して活動の目標やねらいと共にスカウトの様子を出来るだけ個

別に名前を出して説明する。

- ② ジャンボリーや海外派遣は、ボーイスカウトの中でも優等生が行くところであり、わが子がどうすれば参加できるのかわからない。

⇒ 明らかに実態誤認である。ビーバー隊やカブ隊の年代の保護者にもベンチャー隊やローバー隊の活動を紹介して、わが子の今より先の姿を常にイメージできるような工夫が必要である。



20WSJ日本派遣団 東宮御所表敬訪問

## 2. 母親目線で見るとボーイスカウトのPRポイント

**point 5 キーワード「仲間」 家庭でも、学校でもない仲間と居場所がある。**

- ① 一生付き合っていける仲間と出会える。
- ② 仲間の中で一人ひとりの個性を生かし、認め合いながら成長することができる。
- ③ 他の学校、異年齢の仲間とかかわりを持つことができ、子供の居場所が増える。
- ④ 世界中に同じ仲間がいる。
- ⑤ 共に挑戦する仲間がいて、それを見守る指導者がいる。

**point 6 キーワード「自然」野外活動を通じて「生きる力」を身に付ける。**

- ① 自然の中で活動し、日常生活では得られない体験を通じて、スカウトが自身で成長していく
- ② (昨今の防災意識の高まりを受けて) 普段のボーイスカウトの活動が、防災プログラムにつながっている。

**point 7 キーワード「挑戦」 困難なことでもあきらめず、やり遂げる力を身に付ける。**

- ① ワクワク、ドキドキ、ちょっとハラハラするプログラムを展開している。
- ② 仲間と共に、考えて、工夫して、失敗して、遅くなる。
- ③ 目標に向かって、仲間と考え、助け合い、協力することの大切さを体験を通じて学ぶ。
- ④ 家庭では体験できない、年代に応じたダイナミックなプログラムがある。

**point 8 キーワード「多様性」 ボーイスカウトが持つ雑多さがスカウトを遅くする。**

- ① 学校とは異なる別のコミュニティを持つことになる子供たち。  
⇒ 1つの学校からでなく、複数の学校からスカウトが集まってくるので、スカウトにとっては、学校の人間関係を引きつらない別のコミュニティを持つことになり、人間関係に深みが出る。

② 子どもたちを見守る様々な価値観を持った指導者たち。

⇒ 多くの指導者がスカウト達を見守る。その指導者たちは、年齢も職業も様々で多様な価値観の集合体であり、そのような価値観を通して 1 人のスカウトの成長を支援していく。親や学校の先生以外の大人に子供が褒められたり、相談できたりする点に魅力を感じる保護者が多い。

③ どんな子供でも何か興味を持てるバラエティに富んだプログラム

⇒ 野球やサッカーなどの体育的活動、ピアノや書道の様な文化的活動であってもそれだけの活動となるが、ボーイスカウトは進歩科目を通じて様々なことを経験していく。



高崎第 18 団 カブスカウトのナイトハイキング！！

**point 9** ボーイスカウトに入って、わが子は〇〇ができる様になりました。

- ① 自分で考え、自分の意見を、自分の言葉で発言できるようになった。
- ② 他者のことを考え、他者に対する思いやりの心が育った。
- ③ 組長や、次長の経験を通して、責任感を持って物事に取り組むようになった。
- ④ 進級面接を積み重ねることによって、受験時の面接に物おじすることなく臨めた。
- ⑤ 電話の連絡網を通して、電話の受け答えがうまくできる様になった。

3、母親がボーイスカウトに変えないでほしい、変えてほしいと思うこと。

**point 10** ボーイスカウトらしさを失わずに貫くこと

- ① 保護者のニーズを汲んで、ボーイスカウトらしさを変える必要はない。変えると、それを求めて入隊を決めた保護者の期待を裏切ることになる。
- ② 時代が変わっていくからこそ、ボーイスカウトは変わらないでほしい。
- ③ ボーイスカウトとは選んで入るところ。「嫌なら辞めて貰っていいです」ぐらいのスタンスでよい。厳しく叱ってほしいし、ハードな活動もしてほしい。それがボーイスカウトを選んだ親の思い。
- ④ 活動を通して、親も育ててもらっている。親が手伝わなくてもいいようにしてしまったらそれはボーイスカウトではなくなる。
- ⑤ ボーイスカウトはお洒落じゃなくて、泥臭い昭和のイメージがある。今のニーズを汲む必要もあると思うが、スタンダードは変えずにまもってほしい。
- ⑥ 雨のハイキングに親も雨具を着て参加する。それですぐに何かが身につくとは思わないが、

指導者が安全に十分配慮したうえでの非日常的な活動は、家族だけでは決して体験できないものである。

**point 11 母親たちは、ここがちょっと不満、改善してほしいと思っている。**

- ① 休隊制度がほしい。退団と休隊では、受ける印象が大きく違う。休隊であれば部活動で一度離れても戻りやすい。
- ② 休隊制度がある団では、休隊中でも「今日だけは参加」などの仕組みがあると嬉しい。
- ③ 指導者の経験値の差を感じる、地区にインストラクターを置いて、活動内容によっては派遣を依頼できる制度があると良い。
- ④ スカウトの数が多いことに満足せずに、他の団とのつながりをもっと大切にしてほしい。

**4 母親世代に有効な広報ツールとは**

**point 12 新入隊を考える母親から見ると、団のホームページはこんなにもわかりにくい。**

- ① 専門用語が多すぎてみる気が無くなる。  
⇒いわゆる「ボーイスカウト専門用語」を無意識のうちに使っていないか。総チェックが急務である。「ビーバー隊」「カブ隊」はもちろん「隊」「団」でさえ初めての母親には謎の言葉であり（～小2）（小3～5）と注釈を入れるなど配慮と工夫が必要である。
- ② 更新頻度や、表現方法の良し悪しが、その団の印象を決める。  
⇒2ヶ月以上更新が止まっていると、「無くなったのかな？」と思われる。フェイスブックをホームページに埋め込むなど、手軽に更新頻度を上げられるような工夫が必要である。
- ③ 問い合わせへのハードルが高いホームページとは、縁が切れる。  
⇒アドレスをクリックするだけでメールができる様に整備を。アドレスをコピー・アンド・ペーストしなければならないのは、「余計な手間」と映る。また、いまの母親世代にとっては電話よりメールの方がはるかにハードルが低いことを覚えておくことも大切である。
- ④ 写真の使い方ひとつで、印象はまるっきり変わる。  
⇒いまや素人でも上手に写真を撮る時代である。子供たちの笑顔は好印象であるが、整列された集合写真やイラストでは共感は得られない。また、名札が映り込んだ時加工するなどの対応がされていないと、「今の時代のセンスがない」と保護者に判断されてしまう。  
⇒保護者が持つボーイスカウトイメージと、指導者が持つイメージに大きなずれがある。このずれを意識できれば、母親の気を引く良いホームページ作りにつながる。
- ⑤ ホームページから私たちの運動を知る人が増えてきている。したがって、「わかりにくい団体」と受け止められてしまうようなホームページは、自団だけでなくボーイスカウト運動全体に悪影響を及ぼす恐れがあります。

**point 13 口コミに対する母親の感覚は**

- ① 仲が良くても価値観の違う保護者は誘わないことにしている。
- ② 「話が違う」などのトラブルになるかもしれないので口コミはできない。  
⇒口コミに対する抵抗感を持つ母親は意外に多い。口コミだけに頼らないで広報戦略を確りと

**point 14 母親が興味を引く広報戦略とは……**

- ① スマートフォン対応のホームページがほしい。  
⇒外出先でも気軽にみることができる様に、自宅でもパソコンを開かなくても済むようにスマートフォン対応のホームページのニーズは相当高い。また、常に携帯していることから、口

コミのツールとしても活用してもらえる可能性もある。

## ②インスタグラムを活用すると良いと思う。

⇒インスタグラムが例に挙げられたが、よく話を聞くとツールとしての提案ではなく『インスタ映え』という言葉に象徴されるような写真のことを言っていることが分かった。母親目線に立った写真を撮り、広報媒体に掲載することが重要である。



保護者はわが子の活躍している姿を見ている！！

## むすびに

私たちは、子供の習い事に大きな影響力を持つ母親の素直な声に耳を傾けているだろうか？ そのような素朴な疑問からこの母親世代タスクチームを発足した。およそ1年にわたり、5回のチーム会合を行い、その結果を「母親世代タスクチーム報告書としてまとめた。この報告者の内容すべてが日本全国に普遍的に当てはまるとは考えていない（県連ごとに母親たちの意見を聞いてみてはどうか）

「長いスパンで子供を見てくれるのはボーイスカウト、学校の担任は数年で変わってしまう」指導者はスカウトが離れていかなければ、一生付き合っていく事ができる。別の見方としては、「保護者にボーイスカウトの魅力を伝えられる指導者がどれくらいいるのか」との意見もあり、「本当にこの人は、隊指導者をやりたくてやっているのだろうか」と疑問を持つ人もいる。

隊指導者に最も必要とされる要素の一つに「情熱」がある。

教育に必要な3要素というものがあり、①時間である、②技術である。③情熱である

私たち、ボーイスカウトの指導者は、この情熱こそしっかり持ち続けなければならない。

\*母親世代タスクチームと同様の取り組みを県連盟や地区においても展開して頂ければ、必ずや相当の成果をもたらすと考えております。